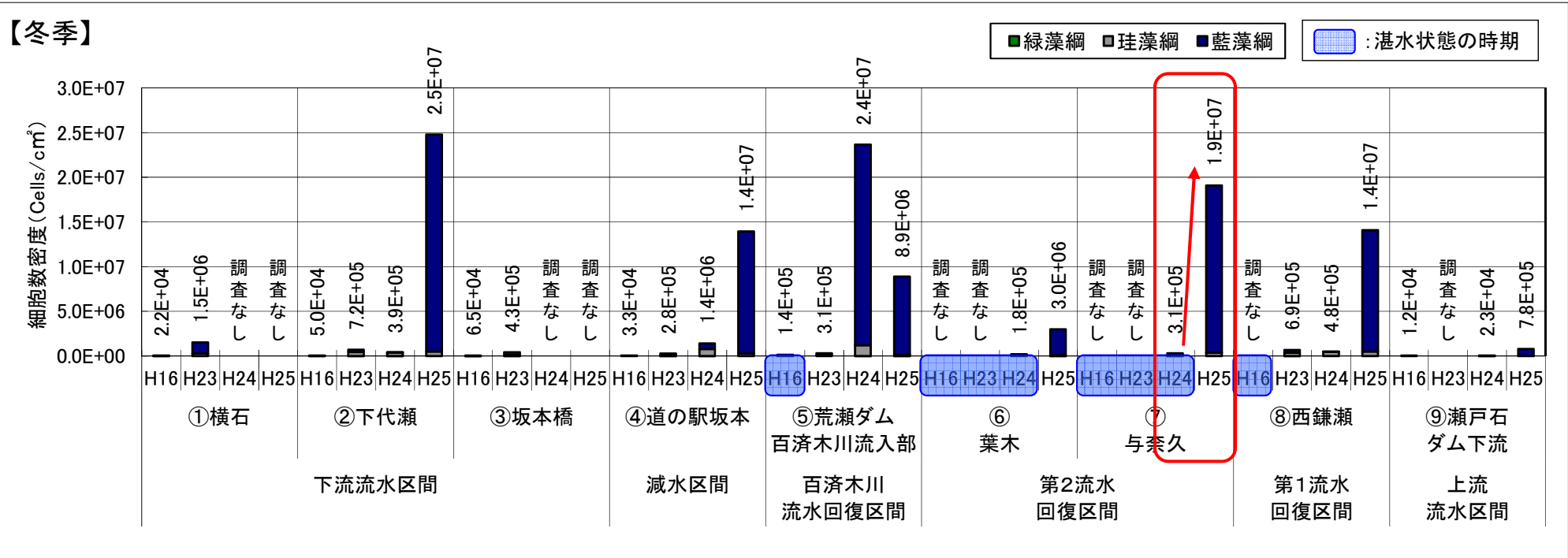


9) 付着藻類
1 付着藻類

【参考資料 I - 192 頁参照】

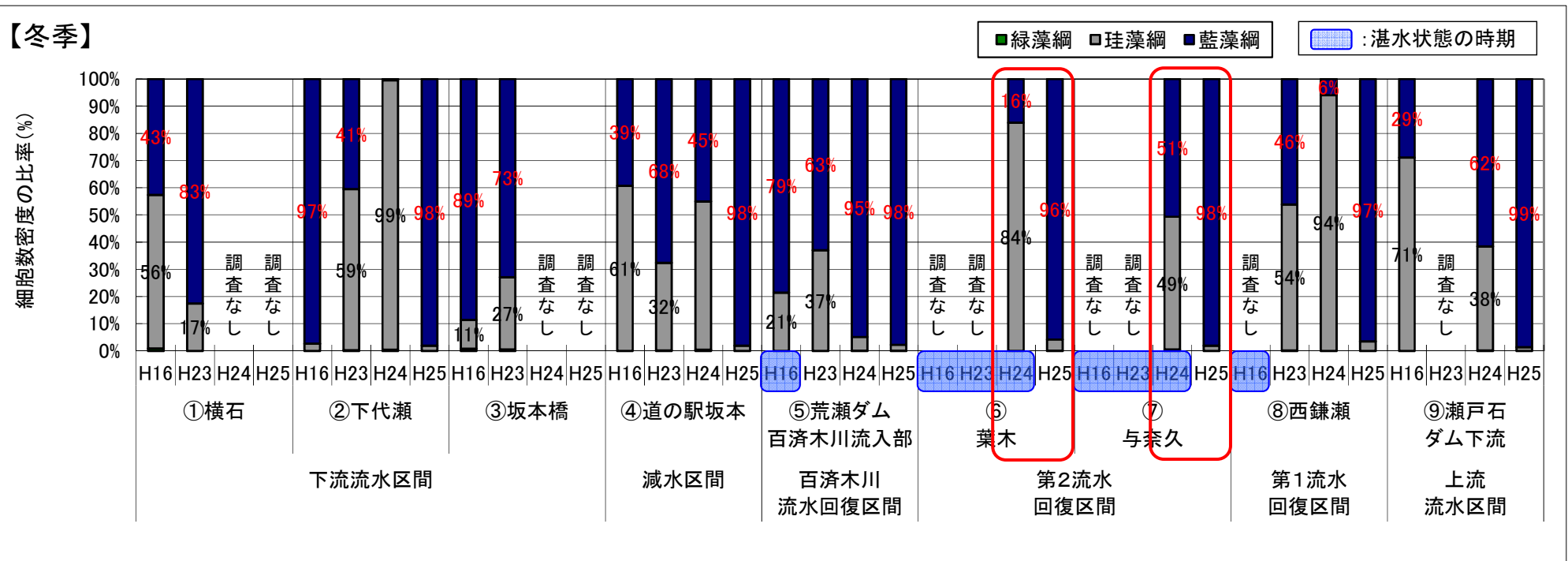
評価項目	視点	平成 25 年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	付着藻類の細胞数密度	・細胞数密度は、「⑦与奈久」ではこれまで低かったが、H25 冬季には増加して他の流水区間並みの数値に達していた。 ・細胞数密度の比率は、「⑥葉木」と「⑦与奈久」は、これまで藍藻綱の比率が低かったが、冬季には高くなっていった。	・H25 年 6 月の水位低下装置の操作による水位低下で第 2 流水回復区間では水位が低下して流水環境に回復し、日光が河床に到達するようになり、光合成を行う付着藻類の細胞数(特に、流水環境に多くアユの餌となる藍藻綱)が増加してきた。

付着藻類の細胞数密度



【用語の解説】

- ・藍藻綱：細胞の中にははっきりとした核のない原核生物であり、群体を形成し黒っぽく見えることが多い。流速が速く、石礫上に堆積物が少なく、アユによる摂食が盛んな箇所でも優占していることが多い。代表種として、*Homoeothrix janthina* (ホモエオスリックス・ヤンチナ) が挙げられる。
- ・珪藻綱：ガラスの成分である珪酸でできた殻を持ち、黄褐色に見えるのが特徴である。流速が比較的遅く、古い石の付着物が残る箇所が多い傾向にある。代表例として、*Gomphonema* 属(クサビケイソウ属)が挙げられる。
- ・緑藻綱：細胞中に緑色の色素を多く含むことから、色鮮やかな緑色に見えるのが特徴である。この仲間の中には、大型糸状緑藻となって繁茂し、アユの餌となる藍藻や珪藻が付着する石を被うカワシオグサがある。



No.1 *Homoeothrix janthina*

分類：藍藻綱 ネンジュモ目 ヒゲモ科

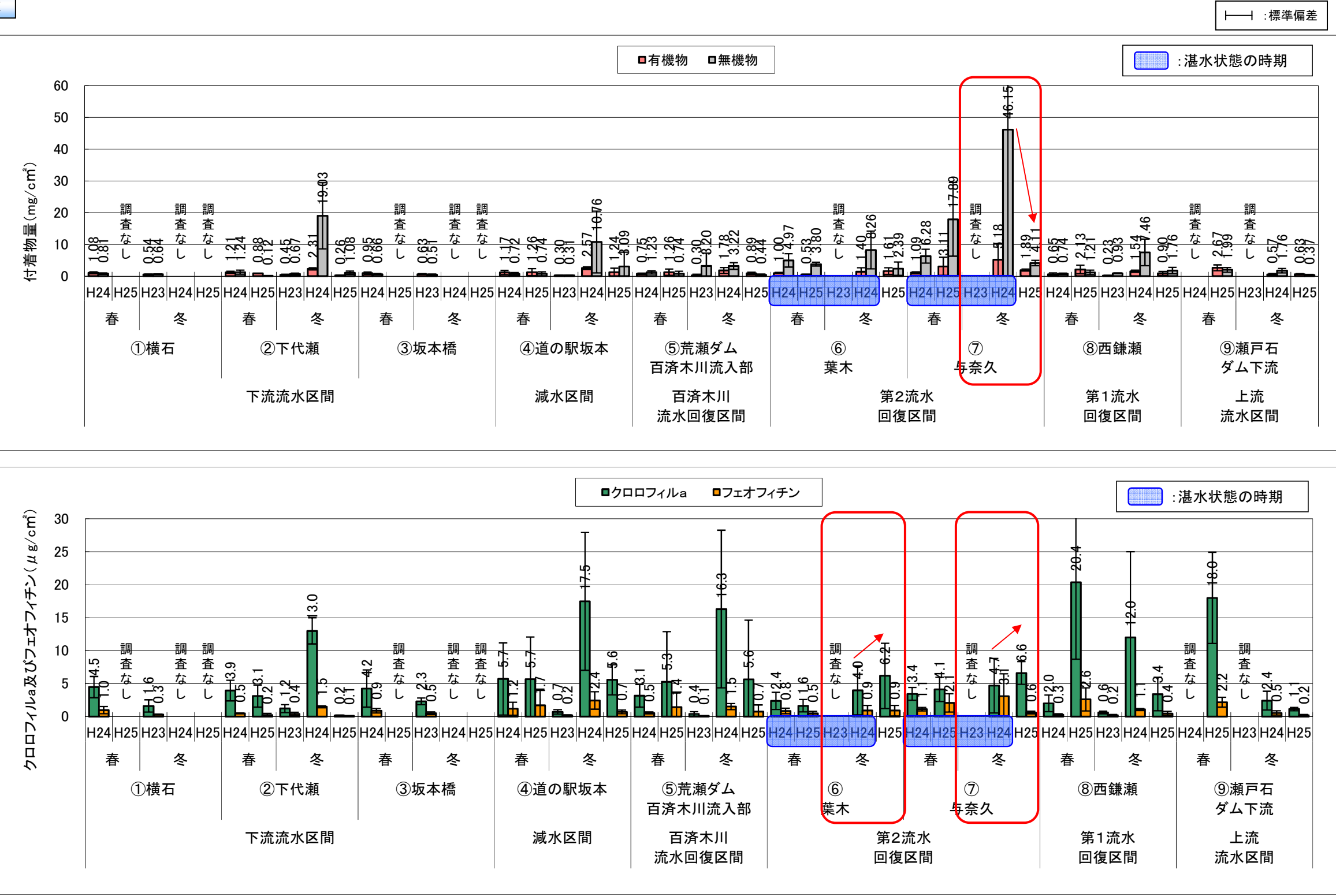
注：写真は本業務で作成

分布状況

- ・淡水、付着性、低地から山地まで。流水に多く、湿岩上に生育することもある。汎布種。
- ・日本国内に広く分布する着生種。
- ・本邦河川の瀬における最も代表的優占種。

評価項目	視点	平成 25 年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	付着物量	・無機物量は、H25 冬季において、「⑦与奈久」で大きく減少していた。 ・クロロフィル a 量は、H25 冬季において、他地点は減少している中で「⑥葉木」と「⑦与奈久」で増加していた。	・H25 年 6 月の水位低下装置の操作による水位低下で第 2 流水回復区間の与奈久では流速が増加し、ダム湛水時に河床の石礫上に堆積した微細土砂が洗い流された。また、クロロフィル a 量の増加に見られるように、付着藻類の活動が活発化していた。総じて与奈久では流水環境が回復しつつある。

付着藻類の付着量



■クロロフィルa ■フェオフィチン

:湛水状態の時期

下流水区間

減水区間

百済木川
流水回復区間第2流水
回復区間第1流水
回復区間上流
流水区間